

高
こう

貞
てい

碑
ひ

523年

(北魏正光四年)

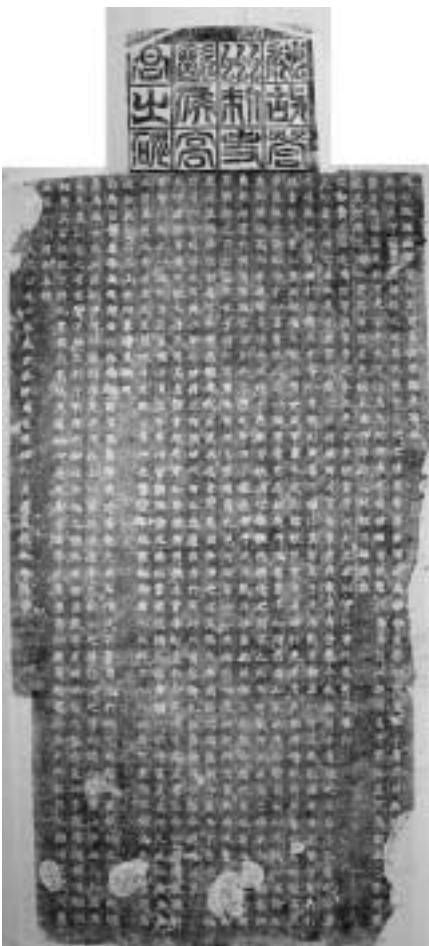
碑法帖拾遺⑯

木雞

木雞室

伊藤滋

高貞碑・整拓本



碑面部分



高貞碑は、十八世紀頃に山東省德州から出土した。現在は、山東省の石刻博物館の中庭に高貞碑と同じ書風の高慶碑と背中合わせのようにして連結して安置されている。両碑とも文革期に石材として利用されたのであろうか、

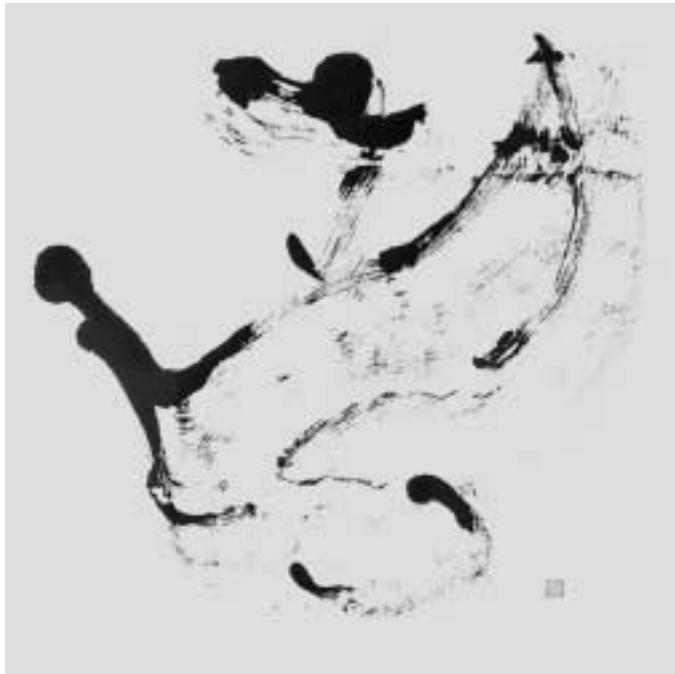
二つに切断された痕跡がある。修理が施された跡が少々痛々しい感じがする。右肩上がりの文字構成は安定感がある。横画は起筆が強く、送筆部分は伸びやかで少し反り返るような趣を示している。力強い筆画のなかに弾力的な響きを醸し出している。

高慶碑の名作の一である。同時代の直線的な鋭い横画を中心とした文字構成の張猛龍碑と並び称せられている。図版に示した拓本は擦拓法で丁寧に拓された精本であり、字画が鮮明に表現されている。

先に言及した高慶碑は、高貞碑と同じ筆者の手になるものと推測されている。碑面が稍荒れて文字の保存状態が善くないために注目する人は少ない。

觀清風於已穆
朗爽陳於東
求備於西
梓梓而離離
杞杞而戴戴
朝始達於金
瑤必割於余
金必割於余
瑤必割於余

書道藝術院 平成の書(2009)



第59回書道藝術院展出品



金澤魯水

書道藝術院展
参与会員

「書道は心の表現」

私が魯水先生を知り得たのは昭和25年頃からで高崎田町の洲崎でした。

当時すでに雅休先生が全国的に組織した書人会で群馬にも上毛書人会として発足、中島邑水先生が高崎女子高校に勤められていた関係から高崎へは文人墨客相集い活況を呈しておりましたが、後年邑水先生が上京するに及び魯水・魯空両先生を中心伊香保温泉や県内各地や邑水先生の生地深谷、本庄にも実技講習会を企画運営の任に当たり邑水先生の奥義を披露していただき何時も百人を超える参加者で盛況でした。

序ながら雅休先生自ら魯岳と称し、全国若手書家に魯の字を与えた魯人会を立ちあげた中の魯水・魯空先生です。魯水先生は、若い時から農協に勤めていた関係で県内の要所に支部を置き書道藝術院展、毎日展と逸材を輩出して碧玉会としての地位を確実にして現在は、大島桂水先生を中心魯水先生を支え活躍しております。

魯水先生の座右の銘は、心を尽して何事もやるという意味の「赤心片々」です。

先生にとって書道とは「心の表現」であって心が書に現れてしまい絶対に嘘はつけないと信念からの表出であると思します。

先生に気軽に誘われて伺うと、うず高い蔵書の中で古典は造像を強調されていました。

前衛の書は、雅休先生と邑水先生に培われ、群馬の雅休門として魯空・聿水・横堀草風先生と故人になられたあとは、魯水先生お一人を大切に皆でお護りしていく所存です。末尾となりましたが、先生の作品は、穏やかさの中に心を打つ温もりがあることです。奇てらうでもなく和やかに先生の温厚な人柄に包みこまれてこの作品の広がりを、私は見た。

〔妄言多謝〕

外所思水記

書のひろば

理事長 恩地春洋

武士桑風先生と中島邑水先生

一院の20回展前後のできごと

暮の12月27日、武士桑風先生死去と訃報が伝わってきた。

「書は芸術であります。芸術の自由を絶叫して決然と起つた……」が始まつた書道芸術院が創立されたのは、昭和22年11月23日のことだった。

この草稿を作成したといわれる伊藤神谷先生も、亡くなられて、院の初期をくわしく語れる人も武士桑風先生を最後にいなくなつた。

院の初期は、大沢雅休、大沢竹胎、香川春蘭、和井田要先生ら、そうそつる人達が、「前衛の芸術院」といわれる華々しい活躍をした。

10回展のあと、箱根会談で組織が整備された。競書雑誌でもある機関誌の「書道芸術」全国学生書道展などにも力を入れ、書道芸術院展は、各支局へ出向いて予選会を実施した頃であった。

武士先生は、前衛書の中心的な指導者として北陸、関東、東北と地方講習会に奔走させていた。

武士先生は、学校教育の面でも活躍をされた。

そして20回展の後、武士桑風、表立雲、山本聿水、関口虚想先生ら前衛書の中心作家が退会した。東北が一番大へんだったようになっている。加藤翠柳先生の決断で院に残留したので、今の大東北総局がある。この後、峰雲、春蘭先生を中心の中島邑水、種谷扇舟、加藤翠柳、川崎梅村先生等が院の建て直しに全力を挙げた。

峰雲先生は「主義主張の違いだから別れるのは仕方がないね」と漏らされたことがあった。この事件の感情的なしこりが残っていたのか、中島、種谷先生は、その後、院の祝賀会へは全く招待状は出さなかった。

前衛書作家は、もともと個性の強い方が多く、退会された方々は、再分裂をくり返していった。最後に毎日展も退会して奎星会と書道芸術院のみの前衛書部となつた。

退会後の武士先生は、現代書作家協会を創設し、墨象作品を発表し続けた。臨書展を企画したり、丑年のグレープ雅誕会の世話人として活躍された。武士先生は原色調の身づくろいで銀座の祝賀会に出席をされた。「お酒を飲めない私が乾杯役はやりにくいわ」と笑つ

その頃、私は、競書の審査に月一回夜行で上京した。中島邑水先生、種谷扇舟先生、山本聿水先生などと顔を合わせることが多かった。19回展の前後、少々空気がおかしいなと思ったことがあった。役員人事が片寄ったことがあった。

そして20回展の後、武士桑風、表立雲、山本聿水、関口虚想先生ら前衛書の中心作家が退会した。東北が一番大へんだったようになっている。加藤翠柳先生の決断で院に残留したので、今の大東北総局がある。この後、峰雲、春蘭先生を中心の中島邑水、種谷扇舟、加藤翠柳、川崎梅村先生等が院の建て直しに全力を挙げた。

峰雲先生は「主義主張の違いだから別れるのは仕方がないね」と漏らされたことがあった。この事件の感情的なしこりが残っていたのか、中島、種谷先生は、その後、院の祝賀会へは全く招待状は出さなかった。

前衛書作家は、もともと個性の強い方が多く、退会された方々は、再分裂をくり返していった。最後に毎日展も退会して奎星会と書道芸術院のみの前衛書部となつた。

退会後の武士先生は、現代書作家協会を創設し、墨象作品を発表し続けた。臨書展を企画したり、丑年のグレープ雅誕会の世話人として活躍された。武士先生は原色調の身づくろいで銀座の祝賀会に出席をされた。「お酒を飲めない私が乾杯役はやりにくいわ」と笑つ

て登壇し、乾盃をされていた。書道界のおしゃれな名物男でもあった。

晩年、病気入院されながら、銀座はさびしくなった。私は、分裂時のようは元より、書道芸術院初期の話を聞きしたいと思っていたが果たせなかつた。95才の長寿を全うした院の先人を偲び、院の初期の思い出をありのままに綴つて追悼したい。雅誕会ではなじみ深い東京銀座画廊美術館で、2月7日「故武士桑風氏を偲ぶ会」が行なわれた。

△中島邑水先生のこと

「オーケストラの指揮者のように書きたい」と、毎日展パリ展に訪仏された時おっしゃっていた。顔というより、頭一面に汗をかいて揮毫されていた姿は忘れられない。

・「書壇」という雑誌を出していた古屋惇二氏が、「中島先生は漢字作家で進んでいたら今頃は日展の審査員になつていただろうね」と話したことがあつた。

邑水先生は、よく勉強された。作家として院を代表する一人といってよい前衛作家として長い間の甲骨文字の研究から強く深い線質の墨象作品を発表された。完成度の高い作品は戦後前衛書運動の大きな成果であると思う。

戦前の前衛書を含め、現代書運動は皆、漢字またはかななどの古典書の学習から出発した。院展初期も臨書部を設けて古典学習をすすめた時代があつた。

・赤城山で学生展の審査をしたことがあつた。邑水先生は必ず用具を持参して暇を見つけて臨書をされた。朝早く起きて食事の前に臨書された。その時は「牛欄造像記」だった。「こんな臨書があつてもよいだらう」といながく苦心した処を説明され、ご指導いただいたこともあつた。部屋を辞する時私たち若者に一枚ずつ臨書作品を頂いたことであつた。先生には書くことが生活の一部となつていた。

・筆を大切にされた。前記パリ展の時、先生の筆をお借りして書いたことがあつた。終つて、筆をお返したら、「まだ洗いが足りない」とご自分で長い時間をかけて洗いなおされた。恐縮して小さくなつた思い出がある。筆墨などは作家のいのちだから軽く借りるものではなく、又、貸すものではないと反省した。

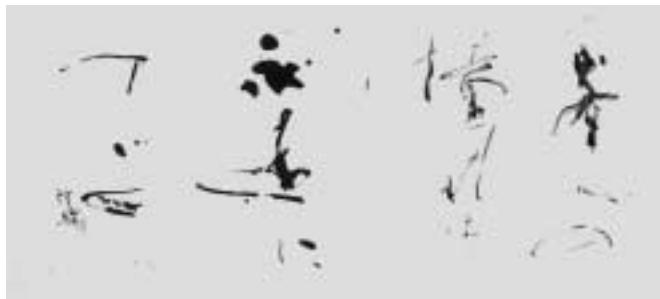
最近は古典臨書の不足が作品を俗にしているものが多い。現代の書を目ざす者にとっては重要なテーマとして忘れではない。

1978年「地の人」



123×96cm 武士桑風書

現代詩文書（五）



憧峯の會書展（2007年）62×140cm 尾形澄神書

「峯への憧れは永遠につづく（自詠）」3年前に「中国へ書の研修視察団」に参加した時の感慨を表した。自然と懐かしさが込み上げたせいか肩の力も抜け、心の趣くまま自分の中にある言葉を淡々とつづった。

筆を運ぶ上で、リズムはとても大切ですが、運筆に緩急をつけるだけでは良い線は生まれてきません。用筆法の中で最も難しく、捉えどころがないのが「筆圧」、つまり筆の上下運動です。筆圧は奥行き（線の深さ）を生み出し、リズムは表情（筆触）を豊かにしている

尾形澄神

きます。筆圧とリズムは表裏一体、どちらが欠けても良い線は出ないので。筆圧は、筆の弾力を使って圧力をかけていくことです。筆の弾力を指先に感じることが出来れば、筆を走らせて

いても、穂先がどこを向いているか、どういう状態でいるのかが、おおよそ感覚でわかつてきます。そうなれば、

むやみやたらと筆を振り回さなくなります。そして、筆を

頗る挫させることを覚えます。

頗る挫させることで、運筆の方向を変えたり、穂先をまとめていくのです。これは、筆の開閉を行なうことと同じです。技術面からいようと、ここまで到達出来れば

相当な技量です。

書は線の芸術、筆力を第一とします。筆圧を生かすためには、執筆法はあくまでも直筆が基本。「直筆に側筆が加わっていく」これが大事です。側筆を中心だと骨のない線質になります。

直筆とは、筆峰が紙面に対して垂直になることで、垂直に筆圧をかけると、穂先はS字の形になります。これが直筆法の基本です。筆管が立っていても穂先が寝ていたら筆力は半減します。なお、穂先を紙にくい込ませようという意識が強くなると、自然と逆筆を帶びてきます。強靭な線は逆筆法から生まれます。

21世紀の書

—私の主張—

漢字（五）

大内熒軒

私が小学生だったころ習い事と言えば、習字、そろばんが多くなったように記憶しています。時代ですね、それが今は英会話でいくつかサイトを調べてみた

スイミングが上位に。では書道習字はどうかとインターネットでいくつかサイトを調べてみた

時代ですね、それが今は英会話でいくつかサイトを調べてみた

（書道）は習い事の中のひとつにすぎません。こうみるとそれなりに支持はあるものの、大人になると文字に対する意識が薄らいでいるように思えてなりません。

私たちには「書」を古典、師匠に学び教わっていますが、何ごとも「好き」制作に妥協は許されません。限られた紙面にどう書くか。

芸術は創作活動です。物まねではありません。そして作品

で刺激を受けながら、「次の作品こそ」という思いで、挑み続けています。

あと、作品を書くために考えることと言えば環境でしょうか。静かなところ、音楽聽きながら、練成会といろいろあります。集中できる環境で、なおかつ心技体の充実を得て書きたいものです。

今回は、試作で「地」。大きな作品は、紙が大きいだけでなく、宇宙と融合することもいいと思います。



「地」

大内熒軒書

ら、ベスト5にはランクインしていません。あるサイトでは高校生でも4位にランクイン。書道はやはり根強い人気がある？ ただ、ランクインしているだけ？ 子供にとってみれば習字

（書道）は習い事の中のひとつにすぎません。こうみるとそれなりに支持はあるものの、大人になると文字に対する意識が薄らいでいるように思えてなりません。

子供にとってみれば習字（書道）は習い事の中のひとつにすぎません。こうみるとそれなりに支持はあるものの、大人になると文字に対する意識が薄らいでいるように思えてなりません。

（書道）は習い事の中のひとつにすぎません。こうみるとそれなりに支持はあるものの、大人になると文字に対する意識が薄らいでいるように思えてなりません。

現代の書新春展

今いきづく墨の華

主催：毎日新聞社・(財)毎日書道会

和光ホール32人展 1月5日(月)～11日(日) 東京銀座・和光6階

セントラル会場100人展 1月5日(月)～11日(日) 東京銀座セントラル美術館

〈和光ホール32人展〉

滝の輝き

恩地春洋



81.5×70.5cm

〈セントラル美術館会場100人展〉

止可談風月
〔南史〕徐勉傳

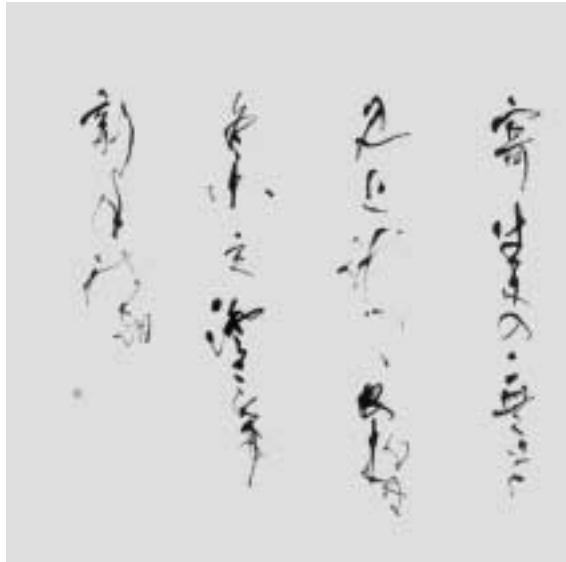
種谷萬城



168×112cm

冬木立
大谷和子

下谷洋子



137×137cm

アンドロメダ

千葉蒼玄



125×150cm

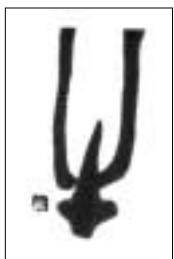
さあ飛ばう
工藤直子

小竹石雲



174×114.5cm

出品作家
〈干支文字〉



恩地春洋書



下谷洋子書

尾形澄神



〈冬深き〉 石地まゆみ

109×168cm



種谷萬城書



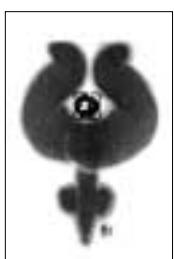
小竹石雲書

太田蓮紅



〈SIN - 心 -〉

97×122cm



千葉蒼玄書



尾形澄神書

半田藤扇



〈春聲先水響〉

116×175cm

(本紙掲載順)

用紙 半紙普通判
＝注＝

※落款を必ず入れる

漢字研究部競書作品は、

左の法帖の中から

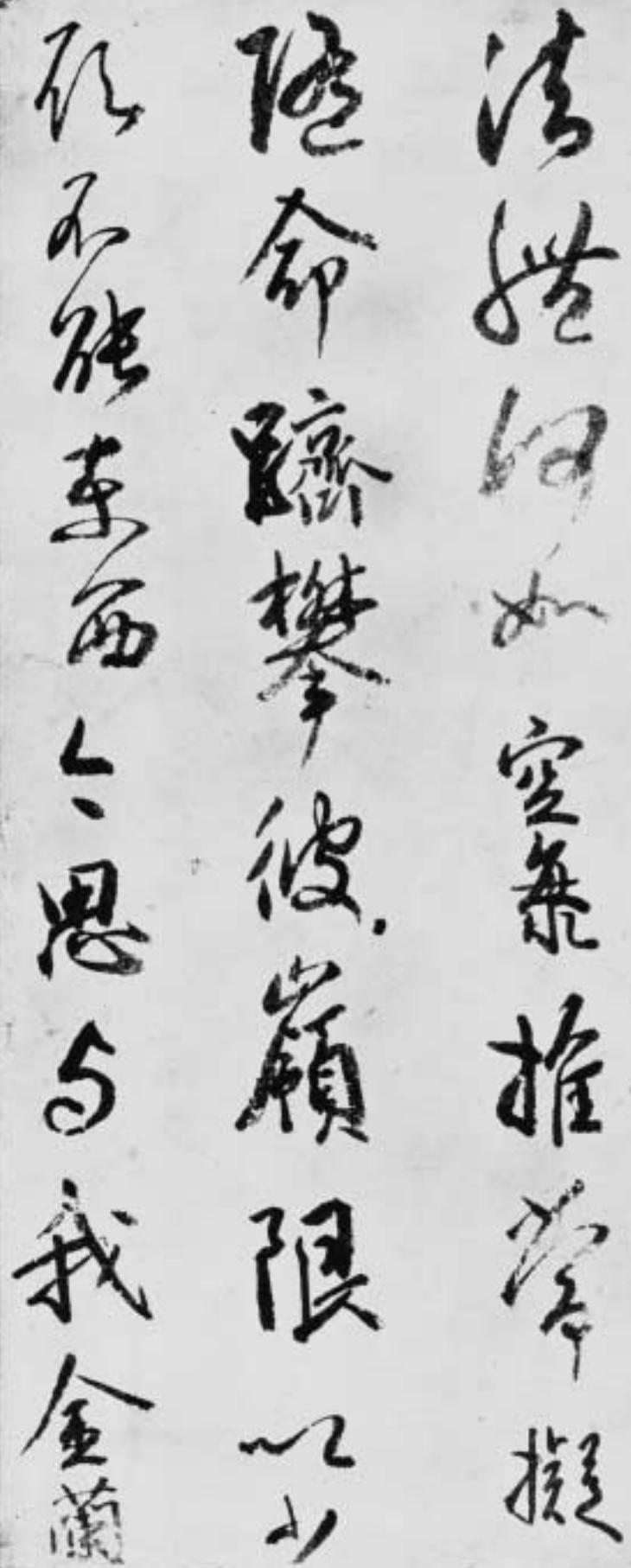
○○臨

何文字臨書してもよい。

(掲載部分以外は不可)

〈解説〉
掲載の風信帖は、第一通目である。第二通を「忽
披帖」、第三通を「忽患帖」と称している。これら
三通の書状がそれぞれに変貌を異にする表現を遂げ

てある。
第一通の日付は九月一日、祝空海と記し、宛名は、
東嶺金蘭とある。東嶺とは比叡山で、金蘭は、深い
交友を意味した言葉で、最澄のことである。(編集部)



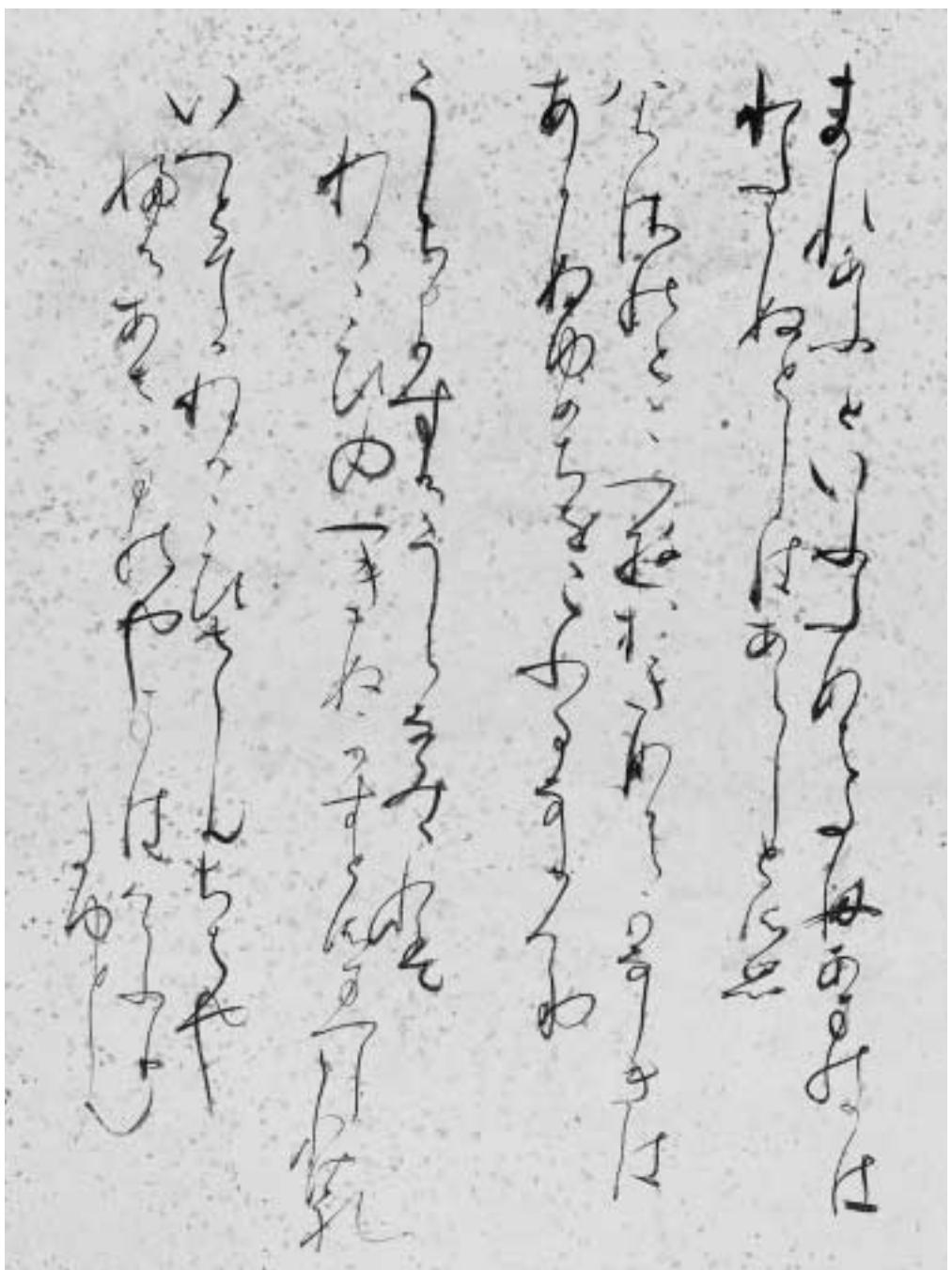
法體何如。空海推常。擬下隨命躋攀彼嶺。限以少願。不能東西。今思下與我金蘭。

*左記の掲載歌一首以上を書く
(全臨も可)

用紙
・半紙普通判(料紙可)

※落款を必ず入れる。
(署名、もしくは〇〇臨
(押印のみも可))

(掲載写真縮小90%)



〈解説〉

本願寺本三十六人家集は、
藤原公任の撰になる歌仙三十
六人の家集のうち、12世紀初
頭に書写された京都西本願寺
所蔵の古写本のこと。粘葉装
の冊子本三十七帖からなる。
明治29(1896)年8月、大口周魚
の調査により本願寺の所蔵か
ら発見され、一躍脚光を浴び
た。今日の研究によると、筆
者は二十人で分担して揮毫し
たとされる。

定信の書は、筆力が強く闊
達な筆致である。

習い方解説 (五)

西林乘宣

國破山河在
(國破れて山河在り)

國都の長安は破壊しつくされた
が、山河のみは依然としてもの
姿をとどめ。『漢詩名句辞典』杜
甫春望の中の一節

草書といえば王羲之の「十七帖」

智永の「千字文」あるいは孫過庭
の「書譜」ということになります。

が、これは基本練習の段階の話で
あり、創作、展覧会作品となると
それを並べただけでは通りません。
つまりそれをベースにさらに連綿
調、潤滑の妙、濃墨による渴筆と
光沢の変化等を追及することにな
ります。

さて、課題に向かうにあたって
は、直ぐに書きはじめないで、そ
れらの古典で少し筆ならしをして
から取り組むようにしたいもので
す。そして狙いを的確に掴むこと。

國破山河在 よみ(國破れて山河在り)

書体=自由



習い方解説(五)

依岡紫峰

道法自然 老子
(道は自然にのっとる)

道理はすべて自然にのっとって
いる。

物事がうまくいかないで困った
り悩んだりする。肩の力をぬいて
開きなおってみると案外うまく解
決するものです。自然の道理に従
うことでしょう。

線を太めにして書いてみました。
ゆったり感のある作品になること
をねらってみました。

「道」 最終画をゆったりとして

長くしてみました

「法」 やや小さめにしてひきし
めました

「自」 やや小さくして然へ

右の「法」上の「自」
とつり合うように大きく
のびやかに



習い方解説 (五)

山藤美知子

ももしぎの大宮人は「暇あれや
梅をかざして」に集へる
(万葉集 春の雑歌 野遊)

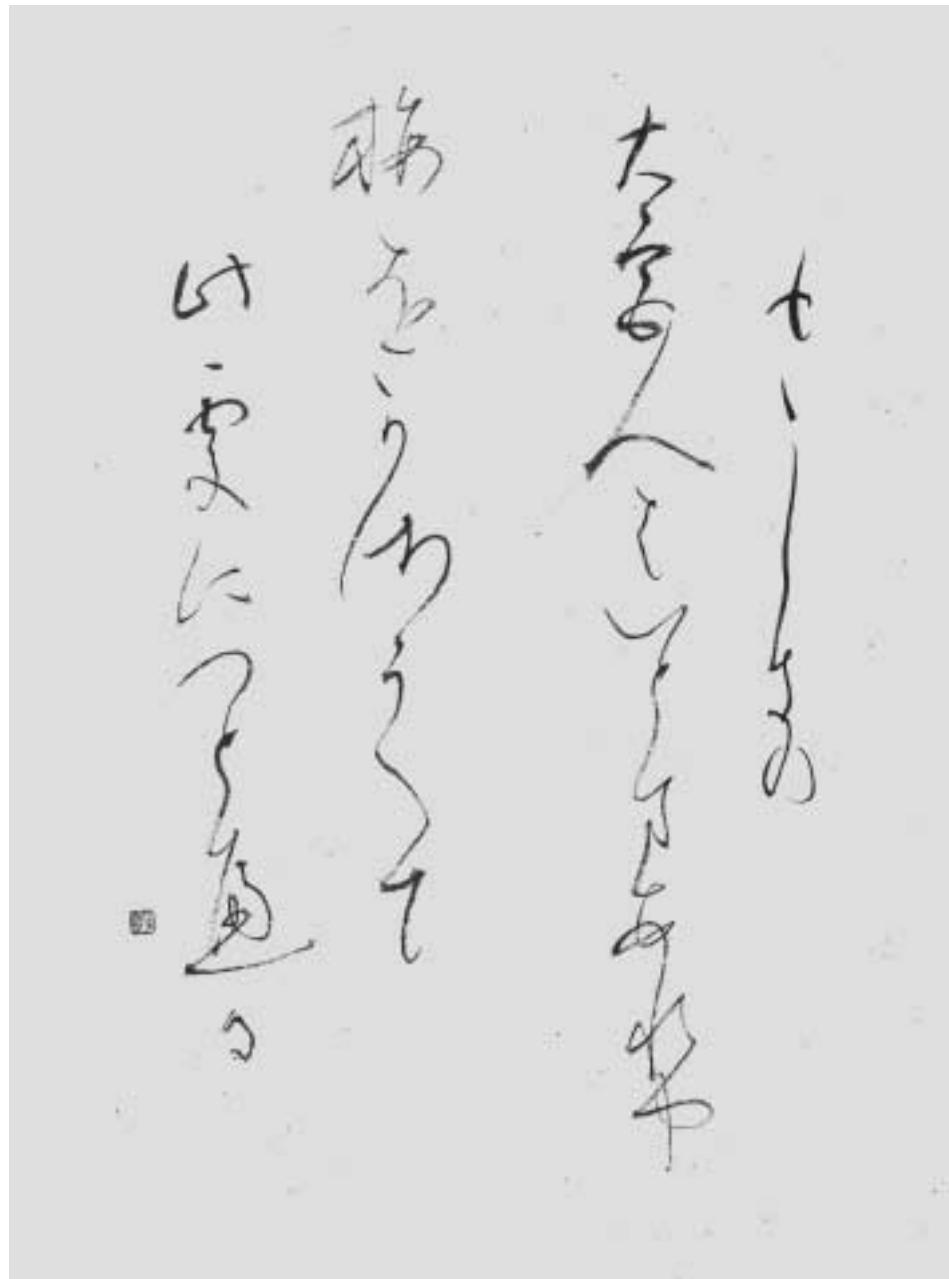
富庭に仕える人たちは、ひまがあつてか、梅を髪にさしてここに集っている。新古今和歌集では、この歌を「ももしぎの大宮人は「暇あれや、桜かざして」の日くらしつ」として載せてあります。

平列四行書きとしました。三字連綿 六字連綿 四字連綿を入れて古典的としました。四角に余白を作り、行間や文字の大小、行頭行尾の処理に注意してください。ゆったりと大きく動いて明るい作品をと心がけました。筆はいたち面相を2~3位おろし、筆圧の強弱で変化をつけます。含墨量に注意して多くなりすぎぬようします。

創作

よみ方 もしぎ(支)の大宮人は(者)いとま(万)あれや

梅をか(可)さ(佐)し(之)てここ(此處)につどへ(遍)る



かな規定 秀級以下 【二月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全體、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種
(掲載写真縮小93%)



よみ方 み(美)はす(春)てつ(徒)こゝろをだ(冬)にもはぶら
さじつひに(尔)はいか(可)ゞな(那)るとしるべへ(久)

習い方解説 (二)

黒川江偉子選書

かな条幅規定【二月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切(料紙可)

うらゝに(1)照れる春日には(耳)雲雀あが(可)り
がり情悲しも獨りしおもへば

(大伴家持)



創作



出品券



貼付位置
*よじ形狀に限る

よみ方 うらゝに(1)照れる春日には(耳)雲雀あが(可)り
情か(可)な(那)しも(毛)ひとし(志)お(於)もへ(部)ば(盤)

横作品は、全体の流れが、つか
みにくく、縦ものより創りにくい
と思います。反面、縦にない面白
さも味わえます。
一行目は低く出て、二字連綿で中
央に大きく二字を置き、最後の三
行を潤筆で小さめに書き集団にし
て見ました。墨色の変化、めりは
りによる余白との呼応など考えな
がら仕上げてください。

漢字条幅規定 初段以上【三月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切

小林琴水選書

習い方解説 (五)

小林琴水



書体=自由

筆先を効かせて、字の大・小のバランスを考え、強さをねらって見ました。横へのはり、字の大きさ、空間の白を美しく見せるよう、考えて見ましょう。

漢字条幅規定 秀級以下【三月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切

一谷春窓選書

習い方解説 (五)

一谷春窓



春 窓 書

書体=自由

鳴く鳥や雀の声にも和楽の情が見える。滲まない紙へ書いたので速やかな運筆となりました。字の書き方の速い人と遅い人がいますが、いずれの書き方の長所短所を知つて自己を生かす法帖を選んで学ぶことも大切です。一字一字をしっかりと書くことばかりではなく全体の調和を考えて書きあげましょう。

鳥雀有和聲
(鳥雀和聲あり)

習い方解説 (五)

安齋映心

「たんぽぽに寄せて」

星野富弘

いつだつたかさみたちが
空をとんで行くのを見たよ
風に吹かれて

ちうた一つのものを持つて

旅する姿がうれしくて

なうなかつたよ 多々美書

今回の詩はかなーの文字が多いので、
少し連綿を入れてみました。連綿で書
いたときの濁点は後で打ちます。
通常、実用書は行書体ですから、ま
ろやかな、かなーの線を習得して流れる
ように書きたいのですね。

※落款を入れ忘れないようにしてください
さい。(落款は自分の名前を入れて
ください。)

書体=自由

用紙=はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

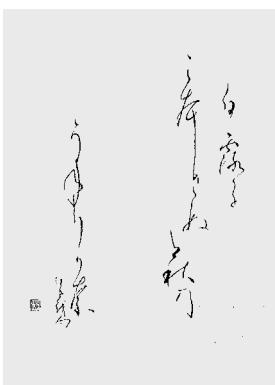
ホープ作品
各部総評

No. 571

かな部 師範 渡辺 紅樓

題材に心を寄り添わせ、咀嚼した深い思いを、あらりと表現した力量に敬服。飽きない作品です。

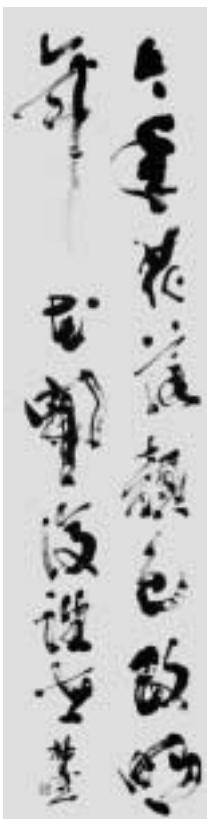
◎かな部総評 字粒、印の大きさへの配慮が欠けたものが多く残念。美の創造を目指す精神を根本に置き、織細さを大切に。（明子評）



漢字条幅部 師範 小林 椿寿
肉太い線質だが軽快なリズムに乗って点のタッチもよく潤滑も目で明るく豊かな作品となつた。

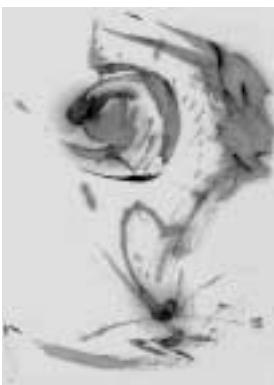
◎漢字条幅部総評 每年だが院展前後は書き込んでいるためか、こなれた作品が多い。技術的なことは書き込む以外にない。（春洋評）

かな条幅部 二段 飯島 律子
曲線が多いため、やや騒がしい感もあるが、弾力の利いた瑞々しさが際立つ。緩急のリズム冴える。◎かな条幅部総評 慣れない方は、出来るだけ難しい変体かなは避けましよう。特に行書は要注意、鹿はねでは誤りです。（洋子評）



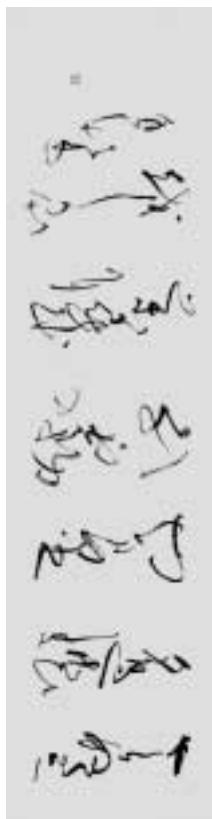
前衛書部 特選 上路 彩炎
工夫された墨色と筆圧による線とが調和された秀作。下部を軽くすると全体に明るくなるだろう。

◎前衛書部総評 個性豊かな作品が多く楽しかったが、落款印の位置にひと工夫欲しい。（洞仙評）



現代詩文書部 特選 加藤 紫翠
顔法を取り入れた重厚な線と、褚法の織細な線を長峰濃墨で駆使。余白も明るく、構成線質共に絶妙。

◎現代詩文書部総評 線や構成に変化あるものが増す。更に古典を取り入れた発展作を望む。（舟雲評）



漢字部 師範 阿部 恵泉
切れ味よくリズミカルな筆致の行書作。バランスよく安定し、落款も冴えあり。鍛達の作。

◎漢字部総評 上級者の隸書風作に基本用筆不安定作多し。形だけまねても無理。下級者の楷書含め古典臨書の基礎力を。（大雲評）



ペン字部 師範 近藤 松春
沈着で筆致安定してて紙面明るい。呼吸良く見事な運ペン、落款の位置も上手く書きました。

◎ペン字部総評 全般的に優れた作が多く嬉しい審査でしたが、分を分と書き少し残念でした。正確に学習をしましょう。（京華評）

今月の

特別研究部 優秀作品（特選）

現代詩文書

（炎佳）佐藤華炎

「スガシカオの詩」



52×170cm

前衛書

（蓮紅）一條紅蕭

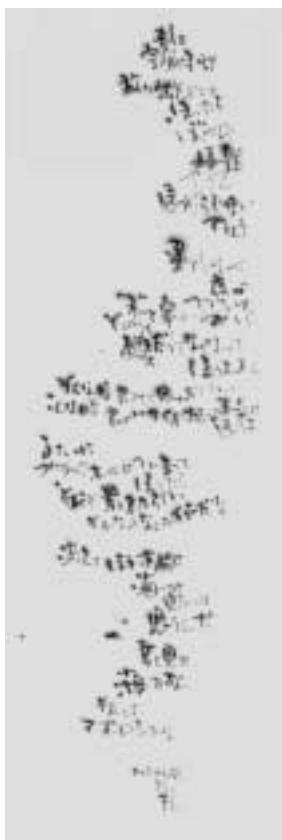
「海」

◆心に描く海は人それぞれでしょ
うが、ヒヨックしたら奥深い海底
はこんな蠢めいた海藻の世界かも
しれないと想像力をかき立てられ
ました。（洋子評）

◆墨だまりに自然と生ずる色の変
化が所を得て上手に表現されてい
る。人間が呼吸するように書の線
にもう少し緩急あると心にひびく
のでは。（倫子評）

◆凝集と拡散、静と動、沈潜と浮
遊の対比、中心は左辺の静寂、全
てを統括する強さある。前衛作品
は静かに対面するだけでも十分では
ないか。（春洋評）

（春洋評）



佐藤華炎書

180×60cm

◆長い詩をあきずに読み下し、その
上墨色と筆の持つ変化によって生ず
る流れを感じさせてくれて書く人だ
けに理解出来る満足感が見える。

（倫子評）

◆いつも楽しい作を工夫して応募の
努力に敬服。横書きをリズミカルに
余白の広がりと共に表現。独特的潤
みが効果的である。（大雲評）

◆墨をたっぷり含ませて置いていく
ように文字を沈めていく。普通に並
べて書いても味わいは變らないだろ
う。かしこさ封じ込めてみては？
（洋子評）

（春洋評）

漢 漢宣 大川代香
墨宣 もく 西川代香
現 現翠苑 氏家久光
か カ 玄穹 千葉大隅
漢 玄穹 千葉大隅
書泉 岩崎西塚 星野晃弘
大雲 佐藤樹原 庄司咏艸
蒼玄 熊谷希雲 伊藤番
大雲 奥村青山 有津成美

今月は62点（漢17、か7、現22、前14、篆2）の
応募がありました。毎月創意豊かな作品を応募する
常連の方々に敬意を表します。作品制作では、マン
ネリ化が大敵、常に新しい発想を持つことが大事で
す。感性を磨くため、素晴らしい芸術作品に触れる
機会を多く持つ日常生活を作ることを心掛けましょ
う。日々の暮らしの中で、自分を磨くことです。作品
の構想は良くても、上質の表現力が不足しては良い
作品に仕上りません。そして筆、墨、紙の吟味も大
切です。良い作品は偶然の産物ではありません。日々
の作家の芸術生活の積み重ねが作り上げます。

総評

（萬城）

（特選候補者）

（萬城）

漢字 (華祥社)

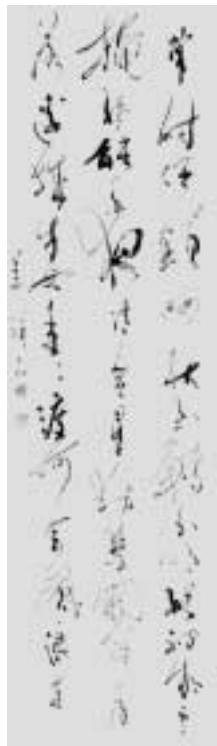
安藤 華祥

「當時」



35×134cm

◆柔らかな筆致が暢びやかで、潤渴の変化のバランスと共に明るく爽やかな作となつた。渴筆部やや走りすぎで軽さが気になる。更に鍛練を。



安藤 華祥 書

168×48cm

◆細い筆で、小手先で書いた遊びのような気がして…。
レパートリーを広げるためなのか？ 私が考え過ぎるのかも知れないが「書とは」？
(春洋評)

◆メリハリの利いた躍動感が目を引きます。長峰の穂先を誘導しての切れのよい動きですが、比較的懐が広いため明るく爽やかに見えます。

(洋子評)

◆筆先の切れ味すばらしい。腕の廻りを大きく構え、筆先効かして表現している。あまりうるさくなく使いこなしているのがすばらしい。

(大雲評)

(倫子評)

現代詩文書 (翠柳) 加藤 紫翠

「土砂の海…」

かな (卯月) 前田 まさ美

「北風吹きぬく…」

前田 まさ美 書



172×53cm

◆潤いのある黒と渴筆の明るさがよいまとめに入ったか。「静寂」は、ややリズムが異なる。作品は一瞬たりとも、リズムを狂わしてはいけない。
(春洋評)

◆濃墨の重厚な線で、疎密をつけた横展開がモダンです。書きはじめを大きく動かし静寂に向かうまとめ方も軽快感やリズム感を説く心憎い。
(洋子評)

◆全体を一つのリズムで包み、墨のかすれを適切な所に表現している。遠くから見るとそれをはつきりと感じさせてくれる。言葉と一緒に情景が目に浮かぶ。

(倫子評)

◆色々な線質が見えて、意欲はよくわかる。全体の統制がむずかしいと思うが中心になる線質を一つ決めた方がまとめやすいかも知れない。

(春洋評)

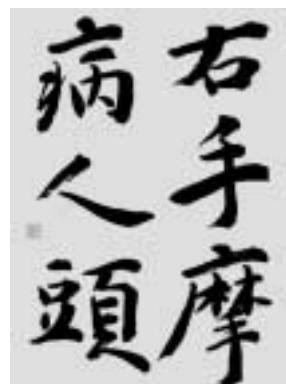
◆今までにない線質が登場し、意欲的な作品です。筆の毛質にもよるのでしょ
うが、細線に無理が窺くので、筆に使
われないように精進を！
(洋子評)

◆珍しく歌謡曲の一節をかな表現して
意表を衝く。書線の厳しさを追求する
点では工夫と努力が感じられるが、もつ
と明るくゆとりある表現も。
(大雲評)

漢字研究部
(三十帖策子)

選評 小伏小扇

今月のホープ作品



鷺山 美佐子

◎漢字研究部特選 鶩山美佐子
二十九帖は一見書きなぐってあるように見えますが、決してそうではありません。
字形の安定、弾力を生かした転折等、精妙な用筆が、高い響きを発しています。
臨書は見事です。学書の深さが伺える佳作です。

漢字研究部特選 鶩山美佐子
邢急がなく、氣力が充実しています。ためらいのない入筆は、自由な角度になって表現されています。思いきった直線の部分にも魅力があります。もう一度、法帖を見直してみてください。
規模の大きさと筆力の豊かさを習得したいもので。



江亮愛白翠紅
彩子菜珠奄雅

虛裕義朴陽初侑
拙子則春子江

明初絹美正蒼代
美江子子江香

谷佑靜昌紀紫
玲子溪子夫泉

かな研究部 (藍紙本万葉集)

選評 山藤 美知子

今月のホープ作品

白鳥者章在祐大般不真稚鈴音又授顧
三名部乃浦處莫渴度始在鈴方海人
半見哀來とみへぬしより
つわらうらもとくまうかん
音振松風

木香楓

◎かな研究部総評
漢字、かなとも癖がないこの古筆をよく書かれた作
多く見られましたが、小さくまとまらず今少し速筆
うまく流れを出して秀作です。

かな研究部成績表

桃昌幸	南栄怜	英紫美代子	雅紅佐枝	雅雲佐枝	かな研究部特選 鈴木 香楓
苑子江	汀子扇	子苑			
書こ前石も春大 泉だ橋習ぐ汀雲 秀	洞千竜廣筑藤春も治筑霜青昌▲千広椿竹正澄椿大蓮正声 書字泉島桜 汀く田桜月峰苑!葉島翠鳳華春翠暉紅華香				
岡大碓伊石朝 部石井鉢藤田倉 千	安永後熊伊高藤戸戸小湯尾木藤大川平木伊飯安穂遊星鈴 守藤谷藤野井部本川元村櫻本井下藤戸野山野木 美				
照星道惠喜爽 芳祥弘石子	楊知紫悦昌晴悦麻智桂泡桃昌幸南栄怜美佐雅枝 風薰子蘭子子月晨苑子江汀子扇子				
八街佳	竹五も椿大春秀千洞秀北正艸五玉翠幕正大樹明玉や椿 美葉く翠阪寿水葉書水陸華玄葉柳張華阪原漢木翠	調生大蘭竹 大泉会	大泉会	大泉会	大千田大阪葉
足助作	横森森百松堀福平濱花西永中都遠近高神庄嶋塩齋小小木君川河川河貝小小 山田野不佐島山田里岡井澤丸山池橋保野寺志 志和	大雲鼎扇	大雲鼎扇	大雲鼎扇	池石飯
実枝	蘭睦藤代白津歌彩竹智悦宏雅ど柳賢佳萩称美つ晃雅淳春瑞優星窓萩西 舟子谷子鈴子華雪子子枝子芳柳雲子碧子紅え代子翠雲子扇萩光鈴				寺田
も八五佐 く街葉原 入	秀青玉紅軒春正春石皓玄大青も澄大秀遊春華秀高秀安英誠伏皓た昌翠千幕大ア竜華松安大もこ土ナ八生大千 峰川苑文亥章華習翠阪青く春阪水雲江祥水陵水波峰和華映か苑葉張雲阪泉祥波阪くだ氣かH街大阪葉				
新熱秋 井田山山 運	渡吉谷茂村宮宮松日比林西浪富德槌玉高高砂鈴新清重猿佐近河北河河加大小押大梅白岩伊石渡 井田山山 木田知木田野崎川丸比田川田澤永井木橋野川木木谷水信渡藤野村合合藤野山野原井田藤寺				寺
藤紅久壽 雪彩枝久	裕理登 信光美珠津愛春愛映湖代雙藤秋荻蕙溪記恵初章洋や多翠し侑冬初閑蕙和智龍雅京久純藤虹綿春良翠子さ子溪彩				
千八百弘千石炎咲英八東高英童館八東高大木華帝う四玄高生東信秀華春秀泉英大青玉生秀筑高石英秀千八A八大正岩遊華大 葉生谷舟葉習佳舟峰街小崎峰泉山街光真雲曜祥塚る谷象崎大向篤峰祥光水会峰雲峰松大明櫻真習峰明葉街I戸雲華沿雲祥拙					
渋篠宍鹿澤佐佐佐佐佐佐酒齊後小古木黒熊木木木北菅神河香燕門片片梶鹿小小大大梅内上岩今猪伊市礪石池安荒 谷戸戸内田藤藤藤々久井藤藤山矢暮柳江野村原下村又野成連味木脇山野川島川森西山田原崎閑谷藤川貝橋崎田藤木 惠					
愛美谷洋雙代華ミ桂町節恵早良笙溪昭美竹幸谷等順尚都欣春静行明祥悦信一美絃裕彩雅喜一久皓岳洋梨泰寿柴清知正尚華孫 華子秀煌鶴子炎ヨ香華子苗泉洋翠二葉穗涼遊子子子暎子翠香子子味代美泉峰子霞久子泉耀子子古祥功					
選坪大高京昌北も己清青竜佐秀竜生	幕千正高山百大稻大土高江有権大調 土遊蓮己石千泉湘春大己青竜秀紅竜紅正八大春 外和阪陵橋苑陸く未水峰泉倉峰泉大				
名若六米吉吉吉山大山山山柳森村三松松前前本堀細福平久樋浜橋橋野西西成中内戸辻田田田館高高須鈴菅生下 氏菜波田田田種根和崎口口堀田田嶋島重岡花島郷切村川山田口本本本沢崎澤澤山藤村 丸原中野橋橋木木谷野島田 名羅	張葉華陵王谷雲毛雲氣陵見秋翠阪布 氣雲紅未舟葉會南汀阪未峰泉峰瑤華街靈汀 登				
選坪矩拳和佑翠四藤美星洋美政龍敏翠翠律麗代谷幸貴和優愛和ズ日都蕙愛瑞彩香尚古博洋貞思千雅幸香利智悦八彩代 子玉子子綾子玉子華子泉毅露博満子舟景子子子蕙雲子香子子エ和子雅菜美峰蓮子塘舟子子子枝子代泉苑舟子広子重舟子					

[特別昇級試験臨書課題]

九成宮醴泉銘（楷書）

漢字部

第一種 半紙に写真掲載の中から4文字を臨書

※左記の写真掲載部分の中から規定の文字数を臨書する。
掲載以外は違反となります。

金無欱蒸之氣微風

徐動有淒清之涼信

金。無_一欱 蒸之氣_一微風_/徐動。有_中淒 清之涼_上信

孟法師碑（楷書）

漢字部

第二種 半紙に写真掲載の中から4文字を臨書

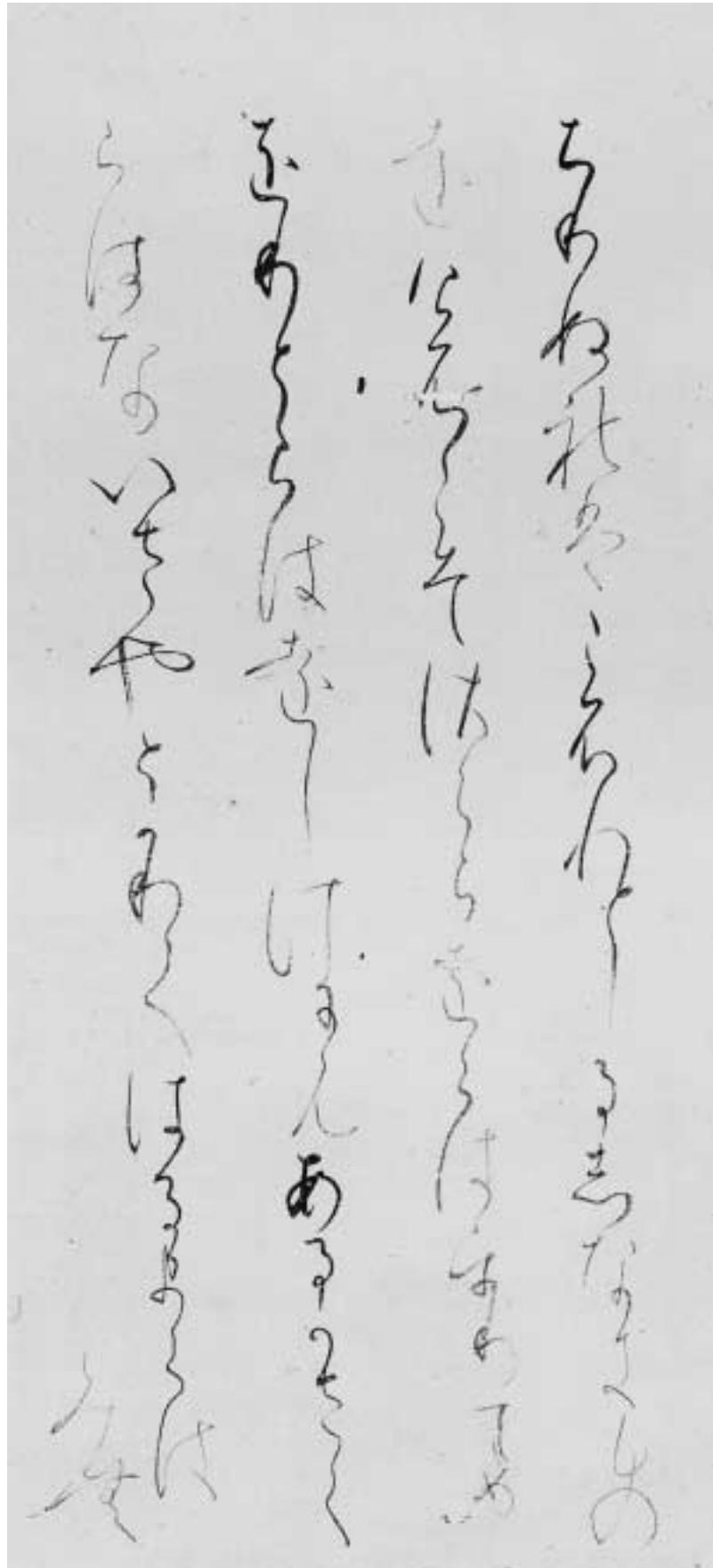
骨於玄廬白玉之簡祈
曲玉而可值青雲之衣

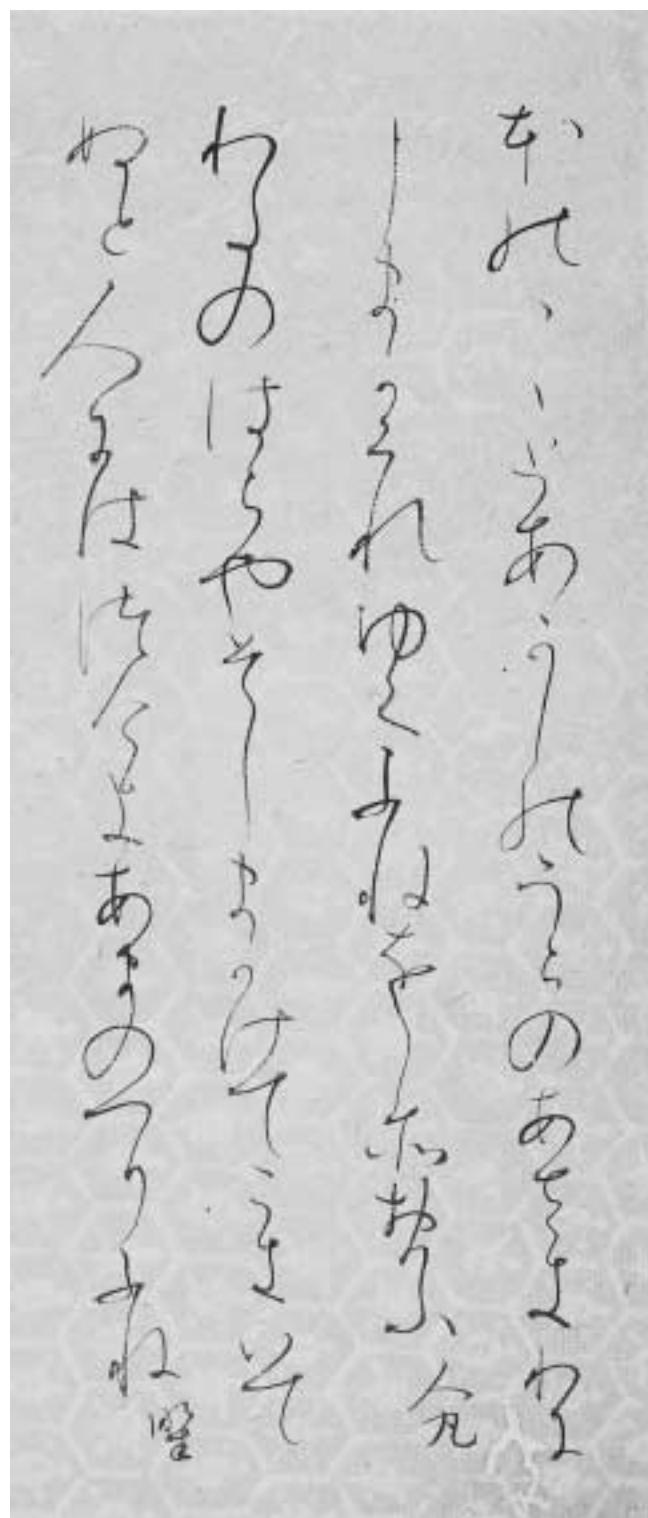
骨於玄廬。白玉之簡。祈。曲玉而可值。青雲之衣。

高野切第一種 かな部 第一種

半紙に写真掲載の和歌・二首を書く(料紙可)

ちりぬればこふれどしるしなきもの／をけふこそさくらをらばをりてめ
をりとらばをしげにもあるかさく／らばないぢやどかりてはるまでは／みむ





ほのぐとあかしのうらのあさぎりに支利爾可能しまがくれゆくふねをしづおもふ人丸
わたのはらやそしまかけてこぎいで支ぬと人には尔つげよあまのつりぶね野

妹の手タチをいとひやまちれヒヤマチレてよしわ
あはれアハレのいふにイフニよしわ

みよのやミヨノヤあうひたよヒタヨいき、
さくさサクサとみゆミムわワよも

みよのやミヨノヤあうひたよヒタヨいき、
さくさサクサとみゆミムわワよも

よのなかヨノナカをいとふやマダのくさクサきとやキあなうアナウのはなハナのいろイロにいイでルにけむ
みよしのヨシノやヤまマのかなカナたタにいイへヘもがなガナよヨのうきウキときトキのかくカクれレがガにせセむ

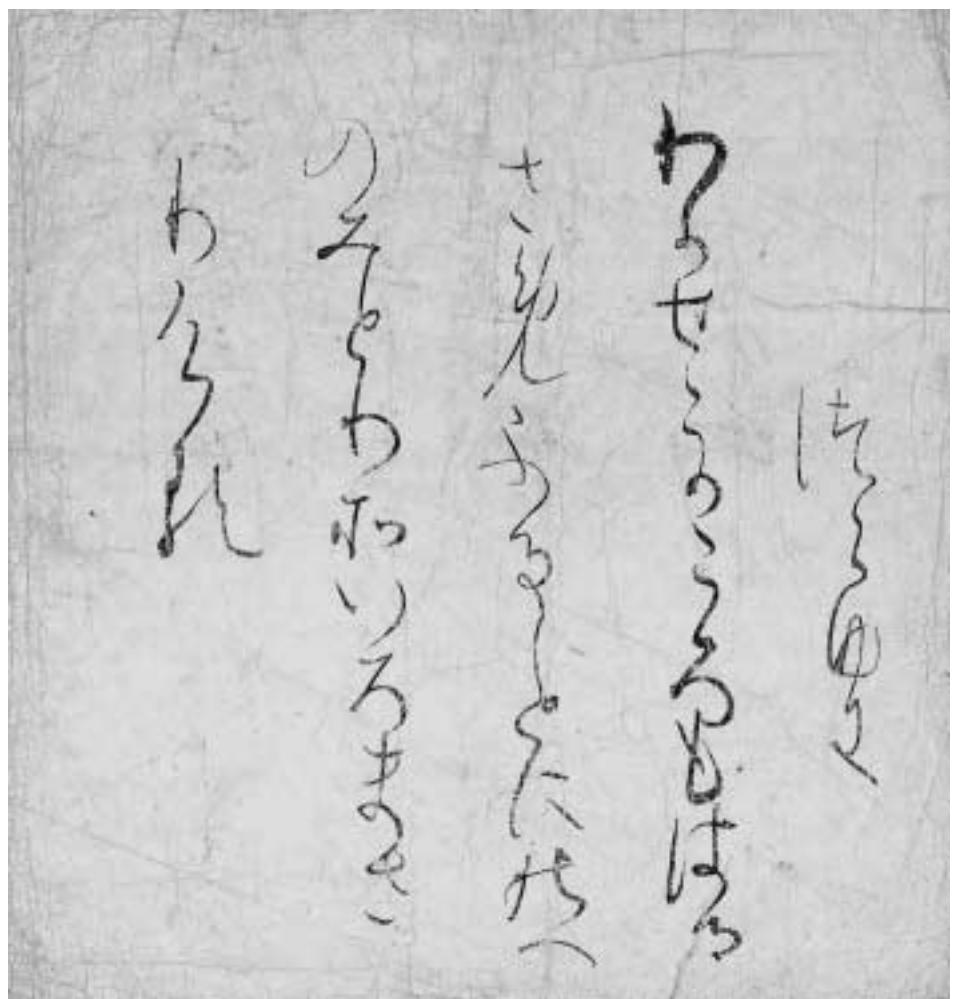
※落款は右枠内でも
枠外でもかまわない

(料紙可)

つらゆき徒 支

わがせこがころもはる

さめふるごとに能ベ

のみどりぞいろまさ利 所りける利 介 類



孫紘。通義尉。沒。／于蠻。泉明。孝義。／有吏道。父開士。（門。）

空才二論或寫俗而是非
大小乘下以時而降精
有玄奘大法師者法門之領
袖也幼懷貞敏早悟三空之心

空有之論。或習俗而是非。／大小之乘。乍沿時而降替。一
有玄奘法師者。法門之領／袖也。幼懷貞敏。早悟三空(之心)。

鴻飛獸駭之資鸞舞蛇驚之態。絕岸頽峯之勢。臨危
間二臨池之志。一觀夫懸針垂露之異。奔雷墜石之奇。
游光映落之姿。彎躉剪此秀之壯麗。新美之勢於予。

鴻こう
飛ひ
・獸じゅ
駭がい
之あた
資。あた
鸞らん
舞ぶ
蛇だ
驚きう
之態。絶ぜつ
岸がん
頽たい
峯ほう
之勢。臨りん
危き。

